

卷

頭

言

衣 笠 洋 輔

一九九〇年代はその冒頭から世界を揺るがす大事件の頻発で始まっている。東西を隔てていた壁の崩壊しかり、湾岸危機しかり、ペレストロイカの進展と停滞しかりである。

今日、次第に力を蓄えてきた多数の日本企業はその企業活動を世界的規模で展開しており、それだけに世界の動きが日本企業に直結する度合も大きくなっている。今後、日本企業がその国際化を推進すればするほど、日本企業はいまだ経験したことのない危険にあふれた未知の世界に踏み込むことになる。

これまで日本企業はその国際化の進展を通して次から次へと新しい問題に直面し、場当りの問題をすり抜けて来た。しかし、この場当りの対応が真の問題解決になっていないことは明らかである。日本企業が世界を動かすほどの強大な影響力を持つに至った現在、長期的視点に立った明確な行動基準とそれを支える理念の確立が不可欠となる。それでは、今後、日本企業はいかなる理念によって行動すべきであるか。そこでは、単に自企業の利益にのみこだわることは許されない。まず、日本企業が活動するすべての地域で現地との利益の共有を図る必要がある。さらに、地球環境の保全、地球からの貧困の追放といった地球的規模での重大な問題の解決にも積極的に貢献することが要求される。

二一世紀に向けて日本企業が地球企業として果たすべき役割、それを支える理念、それを実現する方法を研究することこそ、「国際経営」研究の最重要課題の一つであることを確認しておきたい。

(きぬがさ・ようすけ／経営学部長)